

マレーシアにおける聴覚障害児教育の現状と課題

ーマレーシア・ケバンクサン大学との国際交流による研修報告ー

鄭 仁豪・橋本 時浩

筑波大学人間総合科学研究科障害科学専攻博士前期課程1年

西川 めぐみ・森 亜友奈・郭 思奕・宋 菁・毛 雯晴

2018年9月17日(月)から21日(金)の日程でマレーシアを訪問し、スレンバン国立特殊教育小学校(Sekolah Kebangsaan Pendidikan Khas Seremban), トUNK・アムプアン・デュラ国立中等学校 (Sekolah Menengah Kebangsaan Tunku Ampuan Durah), ケバングサン大学教育学部付属幼稚園 (Tunas Permata Fakulti Pendidikan Universiti Kebangsaan Malaysia), ケバングサン大学 (Universiti Kebangsaan Malaysia), マレーシア教員養成学校 (Institut Pendidikan Guru Kampus Perempuan Melayu), 東南アジア教育大臣機構/特殊教育部門 (SEAMEO SEN : SouthEast Asian Ministers of Education Organisation Perempuan Melayu / Special Education Needs)を視察した。これは、筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻の授業「海外特別セミナー」(鄭教授担当(現筑波大学附属聴覚特別支援学校校長兼務)が、マレーシア研修を今年度企画したもので、それに筑波大学附属聴覚特別支援学校の教諭(橋本主幹)が同行する形で実施された。

キー・ワード: マレーシア 国際交流 特殊教育 インクルーシブ教育

1 はじめに

筑波大学は、留学生の受け入れをはじめ、東南アジアの国々と深い関わりを有している。マレーシアとは、以前から連携・協力関係が構築されており、国立ケバングサン大学の特殊教育課程の教育スタッフとは国際会議等の機会に密に情報交換を行っている。また、東南アジア教育大臣機構の特殊教育部門(SEAMEO SEN)との関係では、筑波大学が日本で唯一の連携機関となっている。今回の国際交流はこうした背景もあって実現した。

2018年9月17日(月)から21日(金)の日程でマレーシアを訪問し、特殊学校や大学および教員養成学校、国の教育行政機関を視察した。訪問は、筑波大学鄭仁豪教授(現筑波大学附属聴覚特別支援学校校長兼務)の担当授業「海外特別セミナー」として、マレーシアの研究を企画し、それに筑波大学附属聴覚特別支援学校の教諭(橋本主幹)が同行

する形で実施された。研修に参加した大学院生は5名である。

各教育機関及び行政機関の視察と現地の教職員やスタッフとの交流を通して、マレーシアの聴覚障害児教育の現状と教員養成のシステムについて学ぶことができたのでここに報告する。

2 マレーシアの教育

(1) マレーシアの学校教育制度

マレーシアの教育制度は4段階からなる。就学前教育、初等教育、中等教育、高等教育である。ただし就学前教育を除き、修業年限は、初等教育(小学校)6年、前期中等教育(中学校)3年、後期中等教育(高校)2年、上級中等教育(大学予備教育課程)2年、高等教育(大学など)3年の、6-3-2-2-3制をとっている(Fig. 1)。それぞれの段階の終わりに

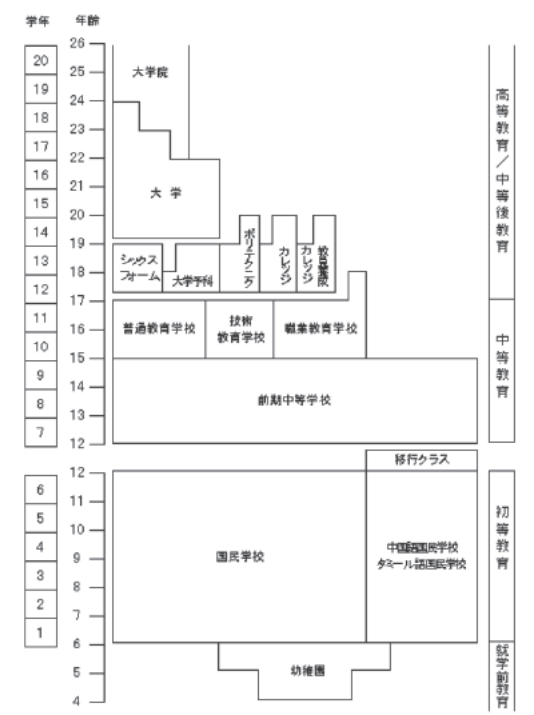


Fig.1 マレーシアの学校系統図

出所：文部省大臣官房調査統計企画課，

諸外国の学校教育(アジア・オセアニア・アフリカ編)

は全国共通学力試験を受験することになっており，その成績で進路が決定される（鐘ヶ江，2002）。

マレーシアでは，教育法の改正により，2003年頃から小学校が義務教育となった。初等教育の就学率はほぼ100%近くに達しており、初等・中等教育全体で見ても増加傾向にある。9年間の初等および前期中等教育は無償で提供される（宮原・近藤，2016）。

① 就学前教育

就学前教育は，1996年の教育法の制定により教育制度に組み込まれた。政府，社会团体，ボランティア団体ならびに民間セクター等，様々な機関によって設立された幼稚園が，4歳から6歳児を対象として就学前教育を行っている。教育省，農村開発省などの公共機関は都市部と農村部に，民間セクターは都市部に多くの幼稚園を設置している。幼稚園はすべて教育省に登録され，教育省が定めるガイドラインに従わなければならないが，教育言語と授業アプローチについては幼稚園にかなりの柔軟性が与えられている（鐘ヶ江，2002）。

① 初等教育

7歳から6年間の初等教育（小学校）学校に就学し，中等教育段階に進む前に十分な基礎が築かれる。6年目の終わりには全国共通学力試験（初等教育成績評価試験）である，UPSR(Ujian Penilaian Sekolah Rendah)を受験し，その結果を基に中等教育機関へ進学する（宮原・近藤2016）。

公立小学校は言語の違いによって，国立小学校，国立中国語小学校，国立タミール語小学校に分けられるが，就学する学校の選択は保護者の判断に委ねられる（鐘ヶ江，2002）。

② 中等教育

中等教育は，前期中等教育，後期中等教育，上級中等教育の3段階に分類できる。前期中等教育（中学校）は修業年限が3年間であり，マレー語を教育言語とする学校のみが設置されている。前期中等教育（中学校）の卒業時にはPMR（Penilaian Menengah Rendah：現在はPT3と呼ばれる学校毎の評価制度に移行），同じく後期中等教育（高校）ではSPM（Sijil Pelajaran Malaysia），上級中等教育（大学予備教育課程）ではSTPM（Sijil Tinggi Persekolahan Malaysia：高等教育資格証明試験）の全国共通学力試験が実施される（宮原・近藤，2016）。

後期中等教育（高校）は修業年限が2年間で，PMRの成績と適性により，普通学校（文系，理系），全寮制学校，技術学校，宗教学校，職業学校，特殊学校に振り分けられる。上級中等教育（大学予備教育課程）は，後期中等教育段階を終えた後，国内外への大学，その他の高等教育機関への進学準備を行う教育課程である。大学の学位課程に進学するには高校卒業後「Form6」と呼ばれる2年制の課程に進学し，STPM（高等教育資格証明書試験）の合格を目指すのが一般的である。STPMに合格することにより国内および国外のほとんどの大学等への入学資格が得られる。ここでは大学進学に必要な一般教養，技術，宗教などの教育が行われる（鐘ヶ江，2002）。

③ 高等教育

マレーシアにおける高等教育は，公立，私立の高等教育機関，主としてカレッジ（高等専門学校），ポ

リテクニク（技術短期大学）、そして大学等によって行なわれている。高等教育の目標は、国家が必要とする人材需要に見合う専門家および準専門家の育成である（鐘ヶ江，2002）。

(2) マレーシアの特殊教育について

① 障害児教育の歴史

マレーシアの最初の特殊教育学校は 1948 年に設立されたプリンセス・エリザベス盲学校である。それ以前は、地域のグループや宗教的施設が障害を有する子どもたちに教育を提供していた。その後、1954 年に連邦盲学校が設置され、学業と職業訓練を提供し、1957 年に独立した後は 1961 年の教育法において障害児教育を取り上げた。1979 年にはマレーシア内閣委員会の報告が提出され、障害児に対し良質の教育を提供することが強調された。

1981 年になって、教育省と社会福祉省(1990 年に国家統一開発省に改称)が分担して責任を負うこととし、マレーシア政府は障害児教育に本格的に取り組むことになった。また、教育省は障害児が教育を受ける場として「最も制限的でない場」(least restrictive environment)と呼ばれる政策を採用した。これは、通常学校の中に障害児のための独立した特殊教育教室(special education classes)を設けることを意味した。1995 年に、障害児教育を扱う特別教育局(Special Education Department)が設けられた(川島，2015)。

マレーシア政府は 2010 年 7 月に障害者権利条約を批准し、この時点から教育分野での合理的配慮の否定を差別として禁止し、インクルーシブ教育の実現に向けた歩みを開始した。

② 障害児学校

障害児の学びの場には 4 つの種類がある。特殊学校、特殊学級、普通学級、リハビリテーションセンターである。マレーシアには聾学校が 23 校、盲学校が 6 校、特殊学級が 635 学級(知的・視覚・聴覚)ある(久野，2008)。

リハビリテーションセンターには、福祉局による地域に根ざしたサービス(CBR: Community Based Rehabilitation)がある。しかし、就学年齢に

達しながら、学校教育が受けられない障害児は 7 千人以上存在し、CBR すらも受けられない障害児がその他にも多数いる(久野，2008)。

③ 障害者登録制度 (1992 年～)

障害者登録制度により、補装具の支給、職業訓練リハビリテーションセンターへの入所(身体障害者のみ)、入所型施設への入所(7 施設)、CBR のリハビリテーションサービス、福祉作業所への入所、特殊学校・学級への入学の支援が受けられるようになっている(ADIC，2019)。

3 学校の視察

(1) スレンバン国立特殊教育小学校

(Sekolah Kebangsaan Pendidikan Khas Seremban)

訪問日：2018 年 9 月 18 日(火)

① 概要

1962 年創立の国立特殊教育学校で聴覚障害と視覚障害の他に、知的障害、言語障害を有する児童が在籍している。寄宿舎があり、遠方の児童は、月曜日から金曜日までを寄宿舎で過ごし、休日にそれぞれの自宅に帰省する。児童たちは学業だけでなく、スポーツや文化活動にも積極的に参加し、数多くの表彰を受けている様子がうかがわれた。

職員室の隣に広い教材研究兼資料室があり、手作りの教具の他、授業で使われる教科書類が保管されていた。教室や廊下は手作りの視覚的な掲示物であふれ、教師の意気込みを感じることができた(Fig. 2)。

同じ敷地内に国立小学校も設置されていたが、互いに行き来することはなく、交流活動も行われていない様子であった。

② 幼稚園

スレンバン国立特殊教育学校には、幼稚園(preschool)に相当する学級が 1 クラスのみ設置されていた。聴覚障害児 3 名、視覚障害児 1 名の複式クラスで、授業はチーム・ティーチングで進められ、この日は幼児がパズルを組み合わせて単語を構成する活動を行っていた(Fig. 3)。

③ 小学校

小学校は、障害種別の学級編成である。視覚障害



Fig. 2 教室の掲示物



Fig. 3 幼稚園での授業の様子



Fig. 4 小学6年生のクラス

のクラスと言語障害を併せ有する重複障害（1名）のクラスも参観した。聴覚障害の6年生（4名）のクラスでは英語の授業を行っていた（Fig. 4）。

中学校への進学に向け、通常学校の児童と同じ全国共通学力試験を受ける必要があるため、真剣な表情で授業を受けていた。聴覚を活用できると思われる児童もいたが、ほとんどが補聴器を使用していなかった。その背景には、補聴器が高額であるにも関わらず国からの補助がなく、片耳だけで4,000～

5,000 リンギット（日本円で110,000～130,000円程度）の自己負担を強いられているという現状がある。NGO 団体の支援による補聴器の支給はあるものの、経済的に困窮している家庭が優先され、全ての児童には行き渡らない。そのため、児童たちは、主に手話を使って、クラスメイトや教員とコミュニケーションをとっていた。

(2) トUNK・AMPUAN・デラ国立中高等学校 (Sekolah Menengah Kebangsaan Tunku Ampuan Durah)

訪問日：2018年9月18日（火）



Fig. 5 トUNK・AMPUAN・デラ国立中高等学校

① 概要

1959年創立の国立学校である（Fig. 5）。現在は中学校と高校の一貫校となり、さらにインクルーシブ学校としての機能を有している。通常学校のなかに特殊学級（聴覚障害）があり、通常学級の生徒数は約1400名、特殊学級（聴覚障害）には約50名が在籍している。特殊学級に通う聴覚障害児は、ほとんどが小学生時代に聾学校で教育を受けていたようだ。マレー系、中国系、インド系など多様な民族の子どもが在籍していた。また、特殊学級は年齢ではなく、能力によってクラス分けがされていた。

② 授業の様子

16～19歳のクラスには6名が在籍していた。単一の聴覚障害生徒のクラスであり、教師は口話と手話を用いて授業を進め、生徒からは手話のみの発信がみられた。通常学級の生徒と同じ教科書を使用して学習を進めていた（Fig. 6）。



Fig. 6 16～19 歳のクラスの授業



Fig. 7 16～18 歳のクラスの授業（調理）

14～19 歳のクラスには6名が在籍していた。聴覚の障害に加え、知的障害をあわせ有する生徒が在籍するクラスである。このクラスでは、「Life skill」を基に授業を行っており、特に調理に焦点を当てたカリキュラムを編成していた (Fig. 7)。

マレーシアの学年と年齢に関しては、Primary School (1～6 年) が 7～12 歳 (13, 14 歳), Secondary School (1～5 年) が 13～17 歳 (18, 19 歳) となっている。Secondary School の 4, 5 年生が日本では高校生にあたる。

基本的な学年と年齢の対応は日本と同じであるが、しかし、聴覚障害児に対しては猶予があり、Primary School で 14 歳まで学び、その後 15～19 歳まで Secondary School に通うことができる。言語面での遅れを考慮した措置である。

(3) ケバングサン大学教育学部附属幼稚園

(Tunas Permata Fakulti Pendidikan
Universiti Kebangsaan Malaysia)

訪問日：2018 年 9 月 20 日 (木)



Fig. 8 ケバングサン大学教育学部附属幼稚園

① 概要

ケバングサン大学教育学部附属幼稚園 (Fig. 8) には、健常児と自閉症児に分けて 2 つのプログラムがあり、施設は共用となっている。ほとんどの幼児がケバングサン大学のスタッフの子どもである。

② 自閉症児クラスの授業

自閉症児のこの施設での教育は 2017 年 7 月から開始された。幼稚園児と青少年の 2 つの年齢段階に分けられ、園児の年齢は 4 歳～10 歳、青少年は 13～19 歳である。青少年は 6 名であり、すべてが「free vocation」という形をとり、昼間は特殊教育学校に通い、放課後にこの施設を利用して教育を受ける。幼稚園児は 42 名で、青少年と合わせると合計 48 名が在籍している。教師は 12 名 (男性は 2 人) で、3 名の教師が 1 つのクラスを担当していた。

4 つのクラスがあり、教室には様々な種類の掲示物や教具があった。子供の一日中のスケジュール表、天気やカレンダー、菓子等の品物とその価格、物事の分類を学習するためのカード等である。これらを使って社会生活上のルールを個別に指導してい



Fig. 9 自閉症児クラスの授業の様子 行動学習

た。また、より重度な自閉症児は座ることを練習していた。

教室には子供の個人情報、行動目標、指導期間が記入された個別の学習計画のようなものも貼られていた。行動が達成されるとチェックをするというもので指導者側の情報の共有が目的だが、個人情報の保護の観点という点で、日本とは異なった意識や風土があるように思われた (Fig. 9)。

子どもを落ち着かせる際に使う「Calming Room」と呼ばれる部屋も用意されていた。

③ 健常児クラスの授業

ここには、7つのクラスがあり、合計128名が在籍している。児童は4歳から6歳までで、1クラスの定員は25名である。各クラスに2名の教師が配置されていた。

6歳児のクラスでは友だちや教師とコミュニケーションをとる際に英語も使用していた。マレーシアは多民族国家であり、統一言語としての英語の教育も重視されている。さらに、小学校進学のための準備として算数の授業も取り入れていた (Fig. 10)。



Fig. 10 健常児クラスの授業の様子

4 関係諸機関の視察

(1) ケバングサン大学 (UKM)

(Universiti Kebangsaan Malaysia)

訪問日：2018年9月20日 (木)

① 概要

ケバングサン大学 (Fig. 11) は1970年にマレーシア政府によって設立された国立大学である。アジアでトップ20位 (Qsでは世界184位) にランクされ、工学および科学技術の分野では、国内トップレベル



Fig. 11 ケバングサン大学教育学部

にある。2つのキャンパスを有し、本部は首都クアラルンプールの南に位置するスランゴル州バンギにある。現在、およそ27000人 (学部生、修士課程、博士課程、留学生) の学生が学んでいる。

② ケバングサン大学教育学部特殊教育課程

ケバングサン大学特殊教育課程の目標には、「特殊教育に携わる有能な教師を育成する」、「最新の問題、傾向、実践事例について深い知識を有する教師を育成する」とある。さらに、今日的な課題の解決に向けて、「教育とリハビリの異なる側面において、豊かな知識と専門性を備えた教師を育成する」、「子どもたち個々の学習能力を適切に評価し、さらに個別的教育計画を開発し、かつ実行できる能力をもつ教師を育成する」、「障害種や特別なニーズに特化した分野だけでなく、さまざまな学習上のニーズに応えるためのスキルと知識をもつ教師を育成する」とあり、これらの教育目標を踏まえて、特殊教育の現場が必要とする人材を育てることを目指している。

ここでは、はじめに大学院生が使用する図書館を



Fig. 12 ケバングサン大学ミーティングルーム

見学した。特殊教育の博士課程に学ぶ学生は 83 名在籍している。ミーティングルームでは教育学部長である Norazah 教授と、Hanafi 教授、Manisah 教授を中心に情報交換を行った (Fig. 12)。

(2) マレーシア教員養成学校

(Institut Pendidikan Guru Kampus Perempuan Melayu)

訪問日：2018 年 9 月 19 日 (水)

① 概要

1935 年に地域の女子教育の振興を目的として設立された。2005 年に教員養成学校 (マレーシアには 27 の教員養成学校がある) となり、マラッカの女子キャンパスとして機能している。また、教師教育研究所としての役割も担っている。

教育課程は、「特殊教育」、「文学」、「小学校教育」の 3 つからなり、特殊教育教員養成のプログラムは 2007 年から開始された。卒業後に、通常小学校の特殊学級の教師になることができるが、交付される免許状は小学校の教員免許のみである。この学校ではシンガポールやインドネシアなどの学校との国際交流を積極的に行っている。

② 施設

はじめに特殊教育関連の講義を受けている学生 (この日は 23 名) の様子を見学し、講義室に設置されている障害児向けの教具のサンプルについて説明を受けた。次に、たくさんの遊具や機器が置かれているスネゼレンルームを見学した。ゴムボールのプール、エアベッド、さまざまな色に変化する室内照明等を興味深く見学したが、この部屋は、ADHD、LD などの障害児の情緒を安定させる効果



Fig. 13 スネゼレンルーム

があるとの説明を受けた (Fig. 13)。聴能検査室と身体感覚機能訓練の部屋 (Fig. 14) も見学した。配慮が必要な子どもが来訪した際には相談のための教室としても使われている。



Fig. 14 身体感覚機能訓練の部屋

(3) 東南アジア教育大臣機構 / 特殊教育部門 (SEAMEO SEN)

(SouthEast Asian Ministers of Education Organisation Perempuan Melayu / Special Education Needs)

訪問日：2018 年 9 月 19 日 (水)

① 概要

SEAMEO は教育、科学技術、文化を通じて ASEAN 諸国の協力を促進することを目的として、1965 年に発足した。特に特殊教育に携わる部門として SEAMEO SEN (Special Education Needs) があり、今回はここを訪問して Safani Bali 所長を中心にスタッフと東南アジアの特殊教育について情報交換を行った (Fig. 15・16)。

東南アジアは ASEAN (東南アジア諸国連合) に象徴されるように、加盟国同士の連携によって地域全体が発展できるような道を模索している。



Fig. 15 SEAMEO SEN が入る建物

SEAMEO もまた同様の形態をもつユニークな組織である。



Fig. 16 SEAMEO SEN のオフィス

SEAMEO には、教育研究分野、医学教育分野、農学教育分野など 19 のセンターがある。加盟国（ブルネイ・ダルサラーム、カンボジア、ラオス、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム）の 11 カ国の拠出金により運営されているが、他に準加盟国として（オーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、オランダ、ニュージーランド、スペイン）の 7 カ国が名を連ねている。さらに 1983 年には他の機関との提携についての提案が討議され、2011 年の時点で筑波大学などが連携機関となった。

理事会は加盟国の教育大臣で構成され、同機関の最高意志決定機関である。理事会は SEAMEO や SEAMEO のユニットが実施するプログラムやプロジェクトの方向性を決める。また、それぞれの地域のセンターには幹部クラスの教育行政官による運営委員会があり、そこではセンターの運営や予算を検討し政策やプログラムを決定する。加盟国には 20 の SEAMEO センターがある。

② 特徴

1965 年の設立以来、SEAMEO は加盟国間の協力を継続し、地域の能力向上のために研修や研究を続けてきた。その SEAMEO の強みは、加盟国間の教育協力を奨励し向上する組織構造にある。

SEAMEO の特徴には、「それぞれの加盟国が自国の強みをシェアしながら、かつ他の加盟国のプログラムに介入することなく、SEAMEO の活動に貢

献している」、「各国が協力の恩恵を受けている」、「SEAMEO センターのプログラムの立案や実施に関して、（省庁レベルからセンターレベルまで）関係者の様々なレベルで定期的に協議が持たれている。このような SEAMEO の会議のユニークな特徴は、有効性の向上に役立っており、トップダウンとボトムアップの双方向から情報が伝わっている」、「事務局が十分な資金で運営され、SEAMEO の活動の調整や、今後の開発計画の支援をしている」、「教育大臣からの権限委譲によって、SEAMEO のプログラムが効果的に実施できている」、「外部機関が二国間協力や多国間協力を通じて加盟国と協力をするのを、地域機関としての SEAMEO が支援している」などが挙げられるが、こうしたことが加盟国間の協力の継続に有効に作用していると考えられる。

5 まとめ

(1) インクルーシブ教育について

本研修では、現地の教職員との交流を通して、マレーシアの特殊教育の現状と課題を学ぶことができた。さらに、特殊教育教員養成の現場も視察することができた。

マレーシアの特殊教育に携わる教職員は、自国の障害児教育の発展に大変意欲的であるように感じられた。しかし、校舎などのハード面ではインクルーシブ教育の形が整備されていたものの、実際には分離教育が主流であることも分かった。マレーシアのインクルーシブ教育は、同じ敷地や建物に教室を用意するところまでは形が整っているが、そこで歩みが滞っているという印象を受けた。

同じ校舎で共に授業を受けることは、障害がある児童生徒にとって、非常に良い学びの機会となる。また、健常の児童生徒にとっても、障害について深く学ぶ機会となり、障害の有無にかかわらず双方にメリットが期待できる。インクルーシブ教育をどのような推進していくかについては今後も検討の余地があると思われた。

自閉症児が健常児とともに在籍する UKM 大学付属幼稚園においてもその形態は同様であった。ただ

し、この幼稚園の場合は大学内に設置された幼稚園と大学の特殊教育の連携、つまり教育の理論と現場の実践を融合することを目的に設置されている。インクルーシブ教育の視点はないが、大学に隣接する立地という好条件のなかで教育と医療及び大学のその他の専門領域との連携を図ることができるのであり、しかも幼児期からの適切な教育を研究することは自閉症児教育において画期的なことだと思った。

(2) コミュニケーションについて

聴覚障害児のクラスの授業では、ほとんどの聴覚障害児が補聴器や人工内耳を装着しておらず、コミュニケーションモードが手話に限定されていた。クラスには軽度難聴と思われる生徒も在籍し、教師に促されて口話で私たちに話しかけてきたが、聴能や発音についての訓練は受けておらず、単にそうした生徒も在籍している程度の認識で受けとめられているように見えた。

日本では個々の障害の程度に応じた教育が浸透しつつあり、口話と手話の両方の意義が確認されているが、聴覚障害教育イコール手話による教育との認識だけでは、一人一人の特徴と可能性を丁寧な目で見るができなくなる。この点では、さらなる意識の改善が必要ではないかと感じられた。もちろんこれには国による補聴器購入のための支援も必要である。

(3) 教育制度について

興味深く感じたのは教育制度やクラス分けである。Primary school において、聴覚障害児は2年の猶予があり、その間に言語の遅れを補って、secondary school に進むというシステムがとられていた。さらに、トゥンク・アムプアン・デュラ国立中高等学校ではクラス分けを年齢でなく、能力によって行っていた。このような制度は、子どもの特性や発達に合わせて学ぶペースを決めることができるため理にかなっていると感じた。また、進学の際に全国共通学力試験があるため、こうした形をとることはむしろ必然なのであろう。ただし、インクルーシブ教育の推進という観点から見れば、その実施の困難さを助

長するシステムになっているようにも思われた。

(4) 教員養成について

マレーシアの教員養成学校では、訓練用の施設を整備したり、積極的に他の国と交流を行ったりしながら、特殊教育教員の育成を推し進めようとしていた。特殊教育教員養成の専門性を維持する上で相当な資金を投入しているようだ。

一方で、幼稚園の教師は教員免許を保有していないという現状があった。さらに、マレーシアの教育教員養成学校では特殊教育の免許を交付しておらず、その専門性とどのように担保するのかについては課題があると感じられた。また、教員養成学校では女性の数が圧倒的に多かった。特殊教育に携わる教師の給料は低く抑えられ、教師たちは副業を持ったり、複数の学校で教えたりしているが、そのために能力向上のための研修などに充てる時間が損なわれている様子であった。今後、どのようにして特殊教育教員の質を向上させるのか、高い専門性を有する教員を輩出するための高等教育政策と教員認定プログラムが整備されることを期待している。ちなみにマレーシアでは、Primary School の教員養成は Teaching training center で、Secondary School の教員養成は大学で行われている。

(5) 今後の展望について

マレーシアと日本では、教育の制度、内容、方法が異なっている。マレーシアが多民族国家（多宗教国家）であることを考えると、その多様性に対するバランスの取り方として理解しなければならないことも多くあり、一概に優劣を判断することができない。しかし、特殊教育に携わる教師の情熱やひたむきな姿を見ることができ、今回の訪問は大変有意義であった。

また、インクルーシブ教育が進展途上という印象は否めなかったが、トゥンク・アムプアン・デュラ国立中高等学校に見るように、聴覚障害に特化した一定数の集団を有する特殊教育学級が存在している点では、今後の進展に向けて大きな可能性を感じることができ、インクルーシブ教育の在り方を探るう

えでの土台はすでに整っているとの印象を受けた。
さらに言えば「SEAMEO SEN」のような組織を
有効に機能させることで、東南アジア諸国の文化や
教育は目を見張るほどの発展を遂げる可能性がある。
この地域の障害児教育の動向は今後も注目に値する
との感想をもった。

<http://www.adinfo.jp/aboutus.html>
(参照日 2018.12.13) :

〔付記〕

本稿は「聴覚障害」2018 年度冬号(2019.2.25 発行 Vol.73) に掲載した報告書を加筆・修正したものである。日本での「特別支援」に対応する用語は、マレーシアの現状を踏まえ「特殊教育・特殊学校(学級)」に統一して記述した。

〔謝辞〕

本研修はケバングサン大学に受け入れ体制を整えていただいたことで実現した。各関係機関との調整にあたっていただいた, Dr . Mohd Hanafi Mohd Yasin, Dr . Mohd Mokhtar Tahar, Mr . Mohd Syazwan Zainal の3名の先生方には心から謝意を表したい。

〔引用文献〕

- 鐘ヶ江弓子(2002)マレーシアの教育政策と学校教育制度.共栄大学研究論集 創刊号,80-105.
川島聡 (2015) マレーシアの障害児教育制度の現状と課題.小林昌之編(2015)アジアの障害児教育法制ーインクルーシブ教育実現の課題ー.アジア経済研究所,145-162 :
久野研二 (2008) マレーシアの障害者の生計と障害自助団体.森壮也編障害者の貧困削減 : 開発途上国の障害者の生計.アジア経済研究所 調査研究報告書,205-226 :
宮原啓造・近藤佐知彦(2016)マレーシアの教育制度と中等教育機関における日本語教育ー高等教育への接続ー.独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン留学交流,61 :
<https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/> (参照日 2018.11.7) :
アジア途上国障害情報センター : ADIC (Asia Disability Information Center,